

# ドイツ語方言と「故郷」 Deutsche Dialekte und „Heimat“

唐 沢 徹

## Summary

Für die Romantiker war die Mundart ein Ausdruck der Stammesart. Mundarten wurden lange mit den Stämmen gleichgesetzt. In den Heimatgedanken hatten sie als „Muttersprache“ einen hohen Stellenwert gewonnen. Mit der Beschleunigung des Verstärkerungs- und Industrialisierungsprozesses der Welt wurde aber eine ausreichende Kompetenz in der Standardsprache für jeden Sprachteilnehmer immer wichtiger. In den ersten Phasen der Einführung der Soziolinguistik in Deutschland wurden Dialekte oft nur als abgewertete „Unterschichtssprachen“ behandelt. In den 70er Jahren hat man doch von einer „Dialekt-Renaissance“ gesprochen und dann in den 80er Jahren von dem neuen „Heimat-Boom“. Die bisher eher negative Einschätzung des Dialekts hat sich zum Positiven hin verändert. Im folgenden wird versucht, die Funktionen des Dialekts unter den sprachgeschichtlichen, gruppenpsychologischen, soziolinguistischen und philosophischen Aspekten zu erörtern.

Key words : Dialekt (Mundart), Stämme, Heimat, Standardsprache, Sprachbarriere, Diglossie.

0. 1971年、ヘッセン放送局で行われたラジオ討論会で、ギュンター・グラスは、「故郷とは何か?」との間に、次のように答えた。

「私にとっては、それはダンツィッヒ。そして何よりも言葉。方言とそれに関連するすべてのもの。話し方、物事の呼び方。それらが私に故郷とその思い出を目覚めさせる<sup>(1)</sup>」。

グラスの故郷ダンツィッヒは、1945年以後ポーランドに属する。グラスは故郷の地と、その地の方言、つまり東プロイセン方言を共に失った。彼は、戦後すぐ、新しい「故郷」を求め、築きあげるためにデュッセルドルフに住んだ。そこでの新しい故郷づくりに失敗し、次に西ベルリンに移り、そこでは大体うまく行っているという。「恐らく、西ベルリン、あるいはベルリンが、私が失った地方に近いということが決定的である」と彼は証言している。グラスは、しかし、「故郷の地」への領土的関心からこのことを言うのではない。戦後失われた旧領土、つまりシュレーゼン、ポンメルン、そして東プロイセンから追われた1000万人以上の人々にとっては、かつての土地への愛着は捨てきれないものであるし、その同郷人会は強大で、そこではかつての地の言葉、民族衣装、踊りが幅をきかせ、政治家達は、これらの人々に対して旧領土に戻れることを約束した。グラスはしかしながら「私は喪失ということから出発する。東プロイセン、ポンメルン、シュレーゼンの3地方を失ったということは、3つの方言を失ったということである。長い眼で見ると、地理的喪失より以上に、それは大きな喪失である」と言う。彼は、戦後、新しい国土区分やまとまった入植地の設定などによって、3つの方言を維持する努力を、ドイツ人が怠って

きたことを残念がる。グラスは、このことに、既に、1965年の連邦議会選挙での社会民主党の応援のための講演「ドイツ人の祖国とは何か?」の中でも触れていた<sup>(2)</sup>。彼はそこにおいて「戦争で失った領土については、『ドイツ人の祖国』から地理的概念として抹消する勇気を持つべきである」とし、代りに、新ダンツィッヒ、新ケーニッヒスベルク、新プレスラオのような新都市を西ドイツ内に建設することを提唱した。そのことによって「かつての同郷人達の手によって、以前の地での伝統的産業が復活され、今死にかかっている方言もルネッサンスを経験することが出来る」と語っていたのである。

グラスにとっては、かくの如く、方言が故郷そのものなのである。このラジオ討論には、ハインリッヒ・ベルも参加していて、ケルンの方言に対する複雑な気持を述べている。一方において、グラスが憧れるようには、彼はケルンの方言には接しない。むしろ、ケルンのなまりに対する拒絶的反応を告白する。つまり、ケルン、その自らがそこで育ったその地のカトリック社会に対する彼の屈折した感情が、彼の方言に対する評価に影響している。ケルンの社会の中に「自己満足」と「田舎性」そして「考えの狭量さ」を見て取る時に、そのケルン方言は、ネガティブなシンボルとなる。ベルにとって、「政治的故郷ドイツ」は、1935年から45年にかけて破壊されたのであり、作家としては、「そこに人が住まうことの出来る土地と基盤としての新しい故郷を、政治的に新しい故郷を求めて行かなければならない」との立場から、復古主義的・教条的なものに対する反撥を示しているのである。それでも、ニーダーライン地方は、彼にとって地

理的な故郷であり、この地方を見捨てることは彼にとっても困難である。グラスのように、方言を失われた同一性のシンボルにまで高めることはないが、ベルの眼にも、故郷ケルンの方言が失われつつあることは明白である。彼は言う、「方言が失われていることは、ケルンでもダンツィッヒと全く同じだ。私が子供達に、3つ文章を言っても、彼等は、単語を2つも理解しない。これが工業社会の発展だ。方言を維持すべきことは自明なこと、しかしケルンでも方言は博物館行きだ。ケルン方言による劇場も、もう演じ手がいない。西ドイツでも方言喪失があるのだ。私にとって、故郷は、物理的にでなく、形而上学的に壊れてしまったのだ<sup>(3)</sup>」。

「故郷」の概念は、ヴィルヘルム時代の「故郷運動」から、国家主義的「原故郷」のイデオロギーを経て、戦後の「故郷に対する権利要求」に至るまで、ドイツの政治的・社会的歴史の中で、様々な刻印を受けてきた。しかしながら、方言と結びついた地域的集団感情の基体として、変らぬ実質も持ちつづけていた。1970年ごろから、社会の工業化、都市化の進展の中で、「成長の限界」や「環境」への新しい意識にも触発されて、再び「故郷」が意識されはじめた。そして、同時に各地に「方言ルネッサンス」が起って、方言への態度も変化している。方言と故郷とのかかわりについて、以下、

1. 方言と地域集団感情
2. 社会変化の中の方言
3. 方言文学、思想での方言
4. 方言の新しい機能

として眺める。

1. ドイツ語の歴史的発展は多中心的であり、多中心の政治・社会・経済的事情のもとで多くの地域言語が発生した。16世紀から18世紀にかけての、超地域的な「新高ドイツ語書き言葉」は、例えば、低地ドイツ語地域にとって、語彙も書き方も余りにも距りの大きいものであったため、そこでは、それが従来の言葉と入れ替ることとなった。つまり低地ドイツ語の標準語化であるが、はじめは、もちろん、これが書き言葉にのみ限られていた。そのため、標準語は、そこでは、「外国語」の性格を持ったのである。オランダに続くドイツ語圏の辺縁では、標準語の書き言葉として、構造的により近いオランダを選択してしまっている。これは、フリースラント地方を中心に、19世紀まで続いていた。また、先の、ハインリッヒ・ベルのケルンの方言、これは、リプアール方言 (Ripuarisch) であるが、書き言葉の採用にあたって、言語構造からして、やはりオランダ語を選んで当然とも言われるくらいなのであるが<sup>(4)</sup>、そこでは、標準ドイツ語を選んでいる。このような状況があるために、今日でもケルンの方言と標準語の距りは大きい。

18世紀までの、この超地域的・規格化的な「新高ドイツ語」の書き言葉は、あくまでも「書かれた」ものであって、日常的な生活のために用いられる言葉ではなかった。そのためには地域の方言が用いられていた。19世紀以後、「新高ドイツ語」が、多くの人によって話されるようになって、いわゆる Diglossie (二言語併用) の状況が生まれた。書かれた言葉が、そのものとして話されるようになったのは、義務教育の結果、学校で誰もが標準語を学んだこと、そして工業化、都市化、移

動性の増大によって、超地域的標準語が不可欠になったからである。この200年間の発展は、方言の後退を示しているが、今日、標準語、もしくは、それに近い形が用いられている割合は、ほとんどの分野で、20~40%である<sup>(6)</sup>ということから見れば、依然としてドイツ各地域では、この二言語併用の中で、主要な言語変種は方言であるということには変りはない。もちろん重要な事であるが、ドイツ語圏内の各地方毎に見れば、その度合の違いは大きい。

このように「標準語」の下に、多くの地域に、地域固有の、それ自体において堅固な言語システムがあるということ、そして、「それらは、相互にも、また超地域的標準語に対しても、ほとんど外国語のような関係にある<sup>(6)</sup>」ということが、今日なお、ドイツの言語生活の特徴である。この状況の故に、「書き言葉から出発した標準語は、純粹には実現されていない」、つまり、それが実際に「話される」時には、「その話者の地方の色合いを帯びる」と言われるのである<sup>(7)</sup>。

この地域と言葉の固有性の考えは、歴史的なゲルマン諸部族の言葉が、現在の地域の方言の源であるという観念に容易に結びつく。すでに、各方言の呼び方、つまり、フランケン方言(Fränkisch)、アレマン方言(Alemannisch)、あるいはリプアール方言(Ripuarisch)という名称がゲルマンの各部族につながっている。ドイツ語の方言学の中でも、方言の境界と部族とのかかわりは、中心的課題の一つであるが、19世紀末に、言語地理学の研究が一定の成果をあげるようになるまで、方言と部族の境界を等しく見ることに大きな反論はなかった。むしろ、ロマン主義者達による

「諸部族の再発見」以来、方言はゲルマン民族の初期の時代からの不変の部族の言葉であるという考えが、ドイツ人の間に広がっていた。

ロマン主義者達は、「ドイツ民族」そして「各部族」に形而上学的な固有の性質を与えようとした。ゲレスは、「部族のあり方は、民族の性格と同じく、持続的に、不変なものとして、そして実際に変ることなしに、永久に決定されたものである<sup>(8)</sup>」と言い、アルントは「原素質」、あるいは「精神的に決定された消し難い性格 (character indelebilis) が、各部族に固有である<sup>(9)</sup>」、と言う。

フーゴー・モーザーは、1957年に中高ドイツ語の構成図と称し、ピラミット型の、民衆語から標準ドイツ語に至るまでの言語成層構造図を発表したが、この時、基礎に民衆語として置かれたものが、12の部族方言 (Stammesmundarten) であった。この中世中期ドイツ語の区分は、今日の方言の基として通用しているところのものである。しかし、モーザー自身が言うように、この部族方言と呼ばれるものが、本当にゲルマン人の初期の部族の言葉から出ているものか否かは、別に研究せねばならない事である。ロマン主義者の考えでは、方言は部族に必然的に属する神聖な、古い畏敬すべき伝承であった。この考え方は、19世紀の方言学にも持ち込まれていた。例えば、シュメラーの考えでは「方言は、自ら閉じた部族方言なのであり、他からの影響なしに自立し、音韻変化法則に従い、アナロジーの作用のもとに発達した、それを話す人々全員の、肉体的・精神的な特別の在り方の発露である<sup>(10)</sup>」となる。このような考え方への疑問は、例えば、シュワーベン地方やライン地方

での言語地理学上の調査からも出て来た。今世紀はじめに、H. フィッシャーは、言葉の境が、例えば、シュワーベンの昔の境界とは一致しないこと、それどころか全く無法則であることを発見した。これに続いて、K. ハーグは、「言葉の境界は、交通上の制約に基づく<sup>41)</sup>」と主張した。交通上の制約というのは、自然の交通の境界や制約、つまり、川、森、湿地、山地等であるよりは、むしろ、政治的な交通の制約の方が決定的であると言われる。「自然的制約は、政治的な境界が消えると、言葉の上の境としては300年ももたない」、「言葉の境は、最近までの3世紀の間の領邦の境と一致するのであり、諸部族の境界は、これとは関係がない」との考え方を示したのである。

この領邦の境の、言葉への影響は、その後、様々に確認された。例えば、T. フリングスは、ライン地方の調査で、領邦の境が、第二次子音推移の度合いに強い影響を与えていることを確認した。シュワーベン地方や、ライン地方では、方言学者達は、領邦の境と、それに、若干の教会や自然の境を加味したものを言葉の境として認めるようになり、A. バッハは、1934年には、「方言が、昔のドイツの部族とその行政区の境と関係するという説は片付けられた<sup>42)</sup>」と宣言したのである。

このように、今世紀のドイツ方言学は、古くからの「部族方言」を否定することで一度結着した。方言の形成は、部族よりも後の出来事であること、そして、各方言に部族の名称がついているとしても、それは、方言と部族との、はじめからの結合を意味するものでなく、むしろ、その名称は、後の、ゲルマン部族の連続性の思想にとらわれた学者達によ

って発明されたものにすぎないこと<sup>43)</sup>、が明らかになったのである。

方言と部族の関係については、一方において、部族についての新しい歴史学の研究によって、部族を血筋と由来による一体性とするのではなく、地理的・政治的なまとまり、法的な結びつきにおいて見る観点がもたらされたことにより、また異った次元で、新しく関係づけられることになった。

部族を規定する要素が「形而上学的本質」というものから解放され、より具体的な条件によって考えられるようになったのである。その新しい考えからすれば、それは、有機体に似て、その発展の中で人格的な特徴を具えるようになった歴史的形成物であり、地理的なものと同時に、政治的要素が大きな役割りを果す。ボーンベルガーは、「部族は、単に同じ系統の人間の集まりであるばかりでなく、異った言葉、由来の人達の集団であっても、古くからの入植地域の仲間として、そして後には、政治的統一として現われてきた集団である<sup>44)</sup>」と考える。その際、その集団の共通の経験に基づく主観的要素が、新たに考慮に入れられた。この要素は、集団心理学的にとらえられる。「たがいに隣り合った狭い地域に、明らかな方言の区別が存在する時には、それは多くの場合事実的な条件の相違に基づく。つまり異った領邦への帰属、そこから生ずる宗派上の異なり、さらに経済、通商、交通の異りに関連する。しかし、この異りが、『我々』という集団意識の結果であることもある<sup>45)</sup>」。

地域的同一性に加えて、他の集団との異りの意識を持った集団の境界が、領邦の成立以前に存在していて、それが境として認められ

ることが、新しい研究の成果である。モーザーは、領邦以前の領域区分や境界の影響を全く無視する「方言の境＝領邦の境」という立場に疑問を投げかけていたが、このような新しい研究をもとにして、領邦以前の境界、これを彼は「心理的境界」と呼ぶが、この境界を重視する。この境界は、昔の「ガウ」の行政区、または「部族」あるいは、大公領と関係があり得るからである。

内的・心理的に結びついた集団、地域心理学的なまとまりとしての集団、の性質、特徴、この研究が、現在の方言学の課題の一つである。モーザーは、「地域心理学的統一について、それが古いものでも、新しいものでも、広いものでも、狭いものでも、その境界を確立する必要性」を訴える<sup>90</sup>。

言語的な統一と、他集団に対しての意識的分離が、まとまったコミュニケーション集団の中に出来上る。この集団が、共通の経験、運命に基づく「集団精神」あるいは「集団心理学的感情」を持っている時には、それが言語の生成発展の中に組み入れて考えられねばならない。方言は、このような集団的感情と不可分だからである。

2. 社会の工業化、都市化と、それに伴う移動性の増大は、地域社会における方言の使用と、超地域的な標準語、もしくは共通語、それぞれの使用に、新たな機能と動機をもたらし、地域の言語生活を、より多層化している。必要に応じて、適切な言語選択をし、それを用いる能力の有無は、今日のドイツの言語生活の中では決定的な意味を持つ。もっぱら方言に頼る人々の社会的困難の問題が、社会言語学によって取り上げられ、「方言話者の標

準語化の促進」が、社会や教育の目標となった反面、地域集団の生活の連帯の中心としての方言の役割は消えずに、むしろ状況においては、方言の能力もまた不可欠となることもあり、多層的な言語使用の中で、方言と標準語の関係は、少なからぬ緊張関係の中にある。以下に、マルチン・ワルザーの証言を手がかりに、上部（南）ドイツ、アレマン・シュワーベン方言、及びバイエルン方言地域を中心に、生活の中での方言の位置を見てみたい。

ボーデン湖畔に生まれ、そこに住む、マルチン・ワルザーは、1967年に、「ボーデン湖文学賞」を授与された時に、「私達の方言についての考え」と題される講演を行った。その冒頭は次のように始まる、「ボーデン湖畔では、言葉というものが、いかに政治的事情に左右されるものであるかを、皆が知っている。150年前、この地で有力になろうとする人は、ミュンヘンやシュトゥットガルトから移ってきた役人達の言葉を模倣した。ミュンヘンのバイエルン方言、そしてシュトゥットガルトのシュワーベン方言は、市民の地位の目印となった。ここで生まれた人々のアレマン方言は、教育、教養の不足の証明となり、バイエルンやシュワーベンの方言の模倣が出世の事実証拠となった<sup>91</sup>」。

講演は、更に、彼の本当の「母語」(Muttersprache)であるアレマン方言が消滅しかかっている事、人々が時と共に、方言を使う勇氣と素直さを失って行っている事、しかしながら、アレマン方言は「死んだ言葉」ではなく、「第一の言葉」として、すべての感覚に作用し、残っていること、すべての表現に、正しいきっかけと、ふさわしい理由を与える「母語」であること、標準語はそれに代り得

ない「非歴史的」で、軽はずみに用いられる言葉、「見通し得ない」言葉である事等を、標準語の表現と方言の表現を比較して論じる。

彼は、結論的に、「方言は、そのすべての意味が壊されてしまっても戻る事の出来る『秘密の隠れ家』であり、『消え去った子供時代』と同じく重要である<sup>88)</sup>」と言い、彼自身は、この「方言の力強い働きの、誠実な証人」となることを宣言して、講演を結んでいる。

冒頭の発言の中には、ドイツの方言の機能と位置づけについて考えさせられる多くの点が含まれている。例えば、ミュンヘンのバイエルン方言やシュトゥットガルトのシュワーベン方言が、標準語と等置されていること、あるいは、内容の点で、ボーデン湖から200kmも離れていて、別の州の州都であるミュンヘン方言が、そこで話されるということはどういうことか？それが地位の目印であるということはどういうことか？あるいは、アレマン語は下層語なのであろうか？といった点である。

第一の点は、まさに、ドイツの言語生活の地域性と多層性を示す好例である。「新高ドイツ語」(Neuhochdeutsch)が、ドイツ語圏全域で「書き言葉」又は「文章語」(Schriftsprache)として使われるようになったのは18世紀後半であるが、これはHochdeutsch「標準(ドイツ)語」、あるいは時にHochsprache「標準語」、あるいはEinheitsprache「統一語」とも呼ばれる。この「標準語」が、完全には「話し言葉」として実現されないとする意見のある事については既に触れた。地方の色合いが、それが話される時には多少なりとも出るということの指摘である。ドイツ語内部

の成層的關係は、方言から標準語および文学語に至るまでの、多くの段階を含んだ連続的な帯として表象されることがあるが、実際的には、この連続体の中に、重点、もしくは中心点を求めて見ると、それは「日常語」(Umgangssprache)となる。ドイツ語の全体を、標準語、日常語、方言に三区分する考え方は基本的なものである。この中で、「日常語」の概念が、十分に定義されないまま用いられるため、この三分法では実態を正しく把握することが難しいことがある。このため、「日常語」を、更に3つの中間段階に細分する試みが導入された。1973年、ビヒエルは、「日常語」を次のように分類した<sup>89)</sup>、1)文章語が日常的交際の中で話される型。これは、理想的「標準」からは、アーティキュレーションと語彙において異なるが、しかし、それに近い言葉である。2)より強く地方的に区分され、シュワーベン方言、バイエルン方言、といわれる如き、主要方言の特徴を含むもの。3)強く方言に影響された型。「半ば方言」とも「都市方言」とも呼ばれる。例えば「ミュンヘン方言」が、これに入る。

日常語が、このように三区分されることによって、全体の構成は五区分となった。ワルザーが、バイエルン方言やシュワーベン方言を、ほとんど標準語と同等に扱っているのは、南部ドイツにおける方言の特別の地位と、更に、大都市の言葉の特別の機能から理解すべきである。

ドイツにおいては、上部(南)ドイツから低地(北)ドイツに向かうにつれて、方言の役割が低くなる。1966年のアレンスバッハの調査では、未だ方言を話せるという人は、南のバイエルンや、南バーデン・ヴュルテンベ

ルクで約72%，これに対して，北のニーダー・ザクセンでは，約46%にすぎない。シュミットの調査では，方言と標準語の評価を，ギムナジウムで行った際には，ベルリンやハンブルクでは，方言は標準語よりも低く評価されたのに対し，ミュンヘンではそうではないという結果が出ている。もちろん，南ドイツにおいても，標準語の社会的機能は，他の地方と同じように重要であるが，南ドイツでは，方言を使用する人は，社会のヒエラルキーの最上部にまで及ぶことが報告されている<sup>40</sup>。

バイエルンにおいては，ミュンヘンを中心に話される日常語，つまり，さきほどの5つの区分の中で，標準語に近いとされた日常語と考えられるものが，時に「バイエルン標準語」(Bairisches Hochdeutsch)と呼ばれ，事実上，この地方で標準語の役割りを果たしている。ワルザーが言及したバイエルン方言は，純粋な方言というのではなく，ミュンヘンを中心とした，標準語に近いバイエルン方言を意味していると考えられる。

ワルザーが，ボーデン湖畔の言葉の状況として報告した事柄は，この地方，つまり，アレマン・シュワーベン方言地域の方言学者レフラーによっても確められている。彼によると，本来アレマン語地域のボーデン湖畔では，フリードリッヒス・ハーフェンで，シュトゥットガルトのシュワーベン方言，リンダウではミュンヘン方言が話されるという<sup>41</sup>。レフラーは，この現象を，社会言語学，社会心理学的な視点から，地域と社会階層における言葉の評価・prestigeの問題としてとらえている。彼によると，一つの社会の中で，すべての地域言語，方言の平等，等価という

ことは観念にすぎないのであり，現実には，事実的に優勢な言語の体系というものが存在する。それは中流階級以上の人々の言葉であり，その言葉は社会的上昇のフィルターの役割を担っている，のである。ワルザーも言うように，有力になりたい人は，そのような「優勢」な言葉を必要とするのである。

優勢な言葉への移行は，心理学的には，地域的劣等感，または，社会的劣等感の克服のためであると考えられる。自らの言葉が，社会的に低く評価され，否定的性質を担ってしまう時には，その言葉の使用に気遅れが生ずる。特に発音上の特徴は，他の要素，つまり語彙，形態論的な異りよりも，心理的に気遅れをひきおこす。社会的上昇のために，特に中間層が，標準語を用いる競争相手に対して，自らの地域的・社会的出身を隠す，このために自分の方言の地方的アーティキュレーションを隠す，またはごまかすということはよく見られる現象である。時には，この努力が目的以上になされて，標準語の発音が，超正確となってしまって，かえって逆効果になるということすらある。

地域的な劣等感が生じるのは，特に大都市という中心を持たない地方においてである。大都市の話し方は，その地方全体の話し方への評価を，社会的・文化的に押し上げる。南ドイツの大都市，シュトゥットガルト・ミュンヘン・フライブルク，マンハイムの人々がその発音を隠す，ということはない。これに対して，アレマン・シュワーベン方言地域で，シュヴァルツバルトの南部，シュヴェービッシュ・アルプ，上部シュワーベンといった地域には大都市が存在せず，地域的劣等感が生まれ，その地域の人々は，遠く離れていても，



一番近い大都市の発音、話し方を模倣しようとする。ボーデン湖畔でのミュンヘン方言の取り入れは、このような社会的・地域的な背景を持っている。

ワルザーの講演の中で、更にもう一つ考えねばならないのは、「アレマン語を話すことが、教育・教養の不足の証明となる」という点である。ここにも方言の社会的評価、イメージの問題があるが、同時に客観的な、方言話者の言語上の困難の問題がある。評価、イメージの点では、アレマン・シュワーベン地域では、1978年に、アモンが学校で行った調査<sup>22</sup>がある。シュワーベンの小学校4年生の前で、完全なシュワーベン方言話者と、わずかながらシュワーベンのアクセントのある標準語の話者が話をし、生徒達は、印象をもとに調査に答えた。それによると、完全な方言話者の方は、「社会的な地位は低い」、「肉体作業を行う職業である」と見なされた。さらに「知的でなく、学校での成績は悪く、信用出来ず、誠実さに欠ける」という評価がなされた。生徒達の、二人の話者に対する個人的なシンパシーの点では同じ結果が出ていたが、方言話者は「よりお人良し、より親切な人」ともされた点は注目された。また生徒の中の、方言を話す生徒は、あらゆる質問において若干方言話者をより良く評価し、また社会階層の点で下層に属する生徒達も、やはり方言話者をより良く評価した。これは、方言が、一般的には下層階級において話されることの反映である。

「二人のうちのどちらが賢く、知的か？」また「二人のうちどちらが影響力があり、地位が高いか？」との問には、方言を話す生徒達の約90%が、標準語の話し手の方をあげて

いる。

方言に対する評価の低さには、一つには、歴史的な誤解がある。つまり標準語と対比された方言は、「標準からの逸脱、離反」と見なされるが、これが言葉の歴史的展開の中に組み入れられると、「方言は、標準語の墮落したもの」となってしまう。このような仮定、考え方は根強い。例えば、学校においては、方言を話すことは、鼻をほじくることや、だらしない姿勢をすることと同じく、「悪い癖」とされて、出来る限り早く退治すべきものとされていた<sup>23</sup>。方言の持つこのような低いイメージは、ドイツの社会言語学の受容の初期に、方言を「限定コード」、「下層特有の社会集団語 (Soziolekt)」としてのみ眺めることにつながった。

モーザーは、既に、政治、経済、文化の面で優勢な他の(地域)集団が現われた時に、上層階級は、その優勢な集団の言葉を受入れることを決心出来るが、下層階級は、これが出来ないこと、むしろ、他の集団と、明確に違っていたい、それとは異なる言葉話したい、等の「集団感情」を持つ、その結果、ますます方言に固執する傾向があることを指摘していた<sup>24</sup>。また、K. ラインの調査報告を見ると、「バイエルンにおいては、方言を話す事自体は社会的差別の基準にはならないが、(これはバイエルンでの方言の特別の地位の故であるが)、しかしながら、そこにおいても標準語もしくは、少なくとも日常語が普通であり、求められる状況が存在する。この時に方言を話すのは他の選択のない人々に限られる、つまり、それは職業や地位の故に標準語を学ばなかった人々である<sup>25</sup>」と報告している。もし、社会階層固有の言葉の故に、社会の中

で、自己を実現することが出来ないということであれば、それは社会の中での「言語障壁」(Sprachbarriere)である。この「言語障壁」の概念は、社会言語学の持ちこんだものであった。社会の中での機会の均等という観点から見れば、方言は、民主的社会の実現のための障害、障壁でしかなかった。初期の社会言語学が「方言＝下層」とし、認知プロセスに限定的に働く「欠陥 (Defizit)」の言葉として、「限定コード」として扱い、いわば「悪魔化」した際には、方言話者の困難という実情があったからである。標準語に対する方言の不利は、例えば、シュワーベン方言地域のチュービンゲン大学では、北ドイツ出身で方言のない学生が、成績についての数値的劣性があるにもかかわらず、セミナーにおいては言葉の上で優位に立つ、ということを多くの学生が証言し、またシュワーベン地方の労働者は、北から移って来た仲間の方が、土地のものよりも組合でより多く発言し、上手に表現する、と言うのである<sup>99</sup>。この意味では、方言と標準語の関係は、社会層間の問題であると同時に地域文化的な問題、障害としても存在するのである。ワルザーが指摘した「教育・教養の不足の証明」というのはこのことを指している。

近年の学校での標準語教育、教授法についての議論は、方言を単に「下層の限定コード」として扱う「社会文化的決定論」の見直し、さらには、「墮落した標準語」の意識から出発した標準語規範の絶対化という、方言の見下しにつながる教授法の見直しの形で進められて来た。社会言語学の内部からは、方言の「限定性」、「欠陥性」あるいは「認知への決定論」のいわゆる「欠陥 (Defizit) 理論」

に対して、「差異 (Differenz) 理論」が、「すべての言語変種は、標準に対して機能的に等価であり、より良い言葉、あるいは、より悪い言葉はなく、ただ、異った言葉が存在する」と主張したことにより、方言を下層語の中へ閉じ込める立場を、一定の修正へと導いた。

この社会言語学内部での、最終的にはイデオロギー的対立に帰着する論争を経て、ドイツ語教授法は、方言の問題をより意識的・実際的に取り入れた。現在は、方言を単に退治するという考えでなく、方言と標準語を、いわば二つの外国語相互の関係のようにとらえ直し、比較言語学的に、双方のかかわり方を調べ、方言を出発語に、その基盤を無視せずに、標準語をより効果的に学習させるという「対称的 (kontrastiv)」な教授法が採用されつつある。つまりこれは、方言と標準語との関係を「望まれた二言語併用<sup>100</sup>」へと導くことを目標としているのである。

3. 社会における自己実現、あるいは社会の民主的意見形成のための不可欠の手段としての標準語能力という観点から、学校における標準ドイツ語教育・教授法の議論の中に、方言の問題が入ってくるまでは、学校の授業における方言についての関心は、もっぱら文学や詩の可能的表現手段として、ヘーベルのような方言詩人の詩に触れながら、その造形力、具像力に着目させるか、あるいは、言語史の一部として、古い言語形式を持った例として教えるかであった。この意味では、方言がその日常的機能から見られず、「根源的・詩的」な表現形態という特殊な観点から見られることとなる。

ヘーベルのアレマン語の詩は、例えば「夏の夕べ」に見られるように、太陽や自然の営みを擬人化しながら、自然の自然らしさ、世界の親密さを表わすために、方言を不可欠の手段としている。方言は母の言葉（母語）であり、彼にとって、母や故郷、そして子供時代を蘇らせるものである。その「子供の眼」によって、太陽や自然を眺め、いわば「幼児神話化」するためには、具体的基盤から離れた抽象的な言葉は不向きである。この、土地や、人、もの、への「近さ」を持つ方言が、詩的のみならず、自然の自然性を現出させる限り、形而上学的な根源性をもたらす。

ドイツにおける方言文学の特徴は、グレベルスによれば、「道徳を教え、内省的で陽気な調子」を持ち、「満足の教えと、小さな地上の満足の行く空間と、成立している秩序の肯定」を教えるのである<sup>98</sup>。方言文学が、基本的に「古き良き時代」への懐古の気分を持っていることは否定出来ない。

方言は、超地域的なコミュニケーションに適した言葉ではない。空間的に到達距離の短い言葉である。それは基本的に、地域の枠の中での了解の言葉である。このことは、しかし単に空間的な問題ではない、その言葉は「家庭的な言葉」であり、「親しい隣人関係」の言葉であり、「共同体」の言葉である。方言の持つ地域的集団感情は、「外」に対して壁を設け、一方内部のそれは、これみよがしに撤廃する。この意味で方言は、その地域集団、その土地の、自己固有の伝統の体現化となり、地域主義の表現となる。方言は「近さ」の言葉である。

方言が「近さ」の言葉として、「言葉」と「もの」、「もの」と「人」とを、他の言葉よ

りも、より近く結びつける言葉と見なされる時、方言は、特別な位置に置かれる。つまり「故郷そのもの」、「源泉」と見なされるのである。

ヘーベルのアレマン語詩が、故郷の農民の生活や感情、そして自然環境を高い法則の下から、自然と人間の営みを区別する事なく、農民の言葉で語る時、その世界は汎神論的な中にも、深く満ち足りた、充足した気分にあふれていた。この家父長主義的傾向の、自己確認的空間の中での、「単純にして神聖な世界」の理想が方言と結びつき、「郷土的・教育的」、「ベンミスティクで懐古的な文化観」の文学が出来上る。ヘーベルは、その郷土ヴァーゼンタールやヘルティンゲン一帯を題材にした詩を、標準語訳する勸めには従わなかった。1960年、ゲングによる標準語訳がレクラム文庫から出されたが、自らやはりアレマン方言地域出身のゲングは、この翻訳の困難さを、「非常に具体的な、感覚的直観的なアレマン語」を「より抽象的な標準語」に移すことの中に見い出している。更にまた、アレマン語と標準語の構造のちがいがから、「韻や、語、典型的な言い回しが断念され、他のもので置きかえられねばならなかった。」ことも述べている<sup>99</sup>。ヘーベルが農民を歌っても、標準語を用いた時には、アレマン語詩のような本質の深みに達しなかったという証言<sup>100</sup>もある。

この標準語に対する方言の個有性についてワルザーは、先の講演の中で、新聞に出ていた当時のケージンガー首相の標準語の文章を、意識的にアレマン語に移すことを試みた際の経験をもとに語っている<sup>101</sup>。第一に明らかになることは、「方言は好んで具体的である」

ということである。ケージンガーの文は、  
Das deutsche Volk ist gegen seinen Willen  
noch geteilt. — (ドイツ国民は、その意志  
に反し、なお分断されている——) と始まる  
ものである。この文を、そのままアレマン語  
に移してみると、S'ditsche Volk isch gega  
sin Willa huot no doald となる。アレマン  
語を実際に話す人にとっては、これはアレマ  
ン語ではなく、標準語の文を単にアレマン方  
言の発音にしたものにすぎない。

方言は、例えば、Das deutsche Volk (ド  
イツ国民)とは言わない。簡単には、mir (私  
達)。そして gegen seinen Willen (彼等の  
意志に反して) という言い方に、方言はたじ  
ろぐ、と彼は言う。方言の言い方は、具体的  
であって、この文に対して、Mir sind dagega  
(私達は反対だ) としか言わないのだと彼は  
いう。その他、heute (今日) は huot, noch  
(まだ) は no となるが、情緒的な no は heute  
を不要にしてしまうこと。hente noch に 対応  
させて Huot no とは方言では言えないため、  
ここでは all を加えて、all no が普通。この  
ようにして、方言で言えるようにすると Mir  
sind dagega, daß mir all no doald sin. と  
なる。標準語の Das deutsche Volk (ドイツ  
国民) は、具体的には表象困難なものである。  
その言葉を使うならば、直ちに、それは意志  
を持ち、それは分断を納得していないものな  
のだと主張し得るものである。これは簡単に  
言える文である。つまり、そう言おうとすれ  
ば言える文なのだ、それを言う際に、人は、  
実際にそれがどのような事であるかを厳密に  
知る必要はない。これに対して、方言で Mir  
sind dagega, daß mir all no doald sin. と  
言う時には、人が実際にそれに反対の時でな

ければならない。つまり、標準語の文は、こ  
れに対して、どんな時にも言えるのである。  
つまり、「方言は、標準語よりも、実際の事態  
により依存する」のである。ワルザーは、こ  
のように、ケージンガーの文を、アレマン語  
に移しながら、方言を通して標準語の文章の  
弱点を見つけ出す。標準語の抽象的な語彙が、  
方言を通して見て、その不確かさの点が浮き  
ぼりになる。標準語を使う人は、沢山の「多  
くを言わない単語」を使えるようになってい  
て、それを慣れた仕方では集め合わせると、あ  
のような大ざっぱな政治的意味を生み出すこ  
とになる、と彼は言う。「方言は維持出来な  
いものを、それとして明らかにしてしまう。」  
ワルザーは、この方言の特質を、方言がこの  
数百年間の言語的成長に対して無関心であっ  
た事、つまり、社会的往来、交際の中でま  
す重要な役割を持つようになった単語を抱  
合わせることを、併合することをあきらめてき  
たことの中に見る。方言の具体性が、人がそ  
れを理解していない単語を用いることに反対  
する。それはまた、「自己の中に正しいき  
っかけを持たない単語を用いることに反対する。  
方言を母語として学んで時には、すべての表  
現は正しいきっかけを持ち、ふさわしい理由  
を持っていたのだから<sup>82)</sup>。」ワルザーから見  
ると、標準語も、外国語同様、単に取り入れた  
だけの言葉で、それは見通しのきかないま  
まに軽はずみに使われるだけなのだとい  
うことになる、それは言葉を「全く非歴史的に用  
いる<sup>83)</sup>」ことなのだと言っている。

ワルザーも言う、この方言の標準語に対  
するより具体的な使われ方は、必然的に方言  
の機能を限定する。現実には、社会の中での  
より複雑・多岐のコミュニケーションの必要の

ために、標準語もしくはそれに近い変種が必要なのであり、18世紀のヘーベルにせよ、20世紀のワルザーにせよ、実際には、標準語も使いわける二言語併用者である。しかし方言が用いられる時には、特に南ドイツでは、素朴なかつての領邦の、あるいは部族の「故郷」、「郷土」の観念に結びつく。

方言と標準語の機能のちがいは、「故郷」が「祖国」(Vaterland)と結びつく時に、標準語のみが母国語(Muttersprache)として使用される事実にも明らかになる。同じドイツ語国でもスイスの場合には、スイス方言は、国家的シンボルたり得るし、方言運動が愛国主義と結びつくが、ドイツにおいてはこれは不可能であった。歴史的に、「外国から国を護り、団結をもたらす結びの糸は、ルターのドイツ語」であった。祖国愛が語られる時には、方言は用いられなかった。「自由愛」、「名誉」、「誠実」、「義務意識」、「勤勉」、「正直」、「気高い心」、「共同精神」といった「ドイツの徳」が語られる時、祖国が賛美される時には、方言は用いられなかった<sup>84)</sup>。

方言の「近さ」が、「故郷そのもの」「源泉」と理解される例として、ワルザーやヘーベルと同じく、アレマン言語地域への特別な思いを隠さない哲学者のマルティン・ハイデガーの言語観があげられる。ハイデガーは、「母なる言葉」、「母語」と、「手段」もしくは「道具」としての言葉を峻別して次のように言う。「本来、語るのは言葉であって、人間ではない。人間は彼がそのつど言葉に答えつつ語る限りにおいて、はじめて語るのである<sup>85)</sup>」、「言葉は、そのつどの、それぞれの言葉である。その中で民族、部族が宿命的に生み出され、そこで育ち、住まうところの<sup>86)</sup>。」これは、哲

学の文脈の中の言葉であるが、しかし同時に、ハイデガーの言語への現実の姿勢をうかがわせるのである。ファリアスは、ハイデガーの生涯の終わり頃に、思索が、二つの互いに補完し合う方向で動いていたことを最近指摘している。つまり、「一方で、彼が対象とする存在者の存在は、この上なく高い抽象のレベルに高められていたが、他方では、そこへ至る入口は、極度に実体化されたものであった。……存在の歴史は、彼にとっては、それを思考によってつかめるようにする手がかりの歴史になっていた。彼が、この手がかりを探し求めた場所は、故郷、彼のシュワーベンのご郷であって、ここは彼にとって、中心の中心、形而上学的民族の居場所であった<sup>87)</sup>。」

ハイデガーは、1960年、ヘーベルのアレマン語の詩「夏の夕べ(Der Sommerabend)」について、「言葉と故郷」と題して講演し、言葉と故郷との関係はいかなるものかと論じた<sup>88)</sup>。その中で彼は、再び「言葉は、そのつど、一つの故郷の言葉である。言葉は母語としての言葉である。言葉はその土地で眼覚め、両親の家で語るところの言葉である。……言葉はその本質からして方言である。……方言のうちに言葉の本質が根ざしている。その中に、もし方言が母の言葉であれば、家に在ることの最も慣れ親しんだところのもの、つまり故郷が根ざしている。土地の方言というものは、ただ単に母の言葉であるだけでなく、同時に、そしてそれ以前に、言葉の母である」と述べた。彼によれば、現代という世界世代の世界時間の中では、「言葉」と「母の言葉」と「方言」と「故郷」のかかわりが、すでに消えてしまっているのである。ハイデガーは、このことを、ヘーベルのアレマン語の

詩を解釈しながら、方言固有の詩的本質、根源語としての方言の本質を示そうとしている。彼は結論として「言葉は、その詩的本質の力により、最も隠れたものであり、故に、最も足りたものであり、心から贈る故郷のもたらし」であり、言葉と故郷との関係は、故に「言葉は、故郷としての言葉である<sup>94</sup>」と結ぶ。ハイデガーにあっては、標準語は、インフォメーションの「道具」である。しかし、言葉は「道具」でないこともあり、それは、通常の関係以外の、より深い関係を蔵している。つまり根源としての言葉であり得る、これを方言の中に求めているのである。

4. 言語学史的に、ドイツ語の発展が、最初の地域内での方言使用という一言語の状態から、多くの人々が方言と標準語の両方を話すという現在の二言語併用 (Diglossie) を経て、他の多くの言語がそうであるような標準語のみの一言語使用へと進むものなのかについては様々な意見がある。工業化・都市化の進展は、インフォメーションの手段、道具としての標準語の使用の拡大を伴っている。この言語的プロセスは、ワルザーが言うまでもなくもはや、後もどりは不可能である。従来から、教育の拡大と啓蒙とによって方言使用が終るといった考えもあった。マスメディアの効果、第二次大戦後の、旧領土の喪失とそこを追われた引揚者の移動、都市化の促進によって方言の終りが、いつも予想されていたが、現実には、方言は無くならない。方言使用についての大規模な調査は、1966年と1980年の2回にアレンスバッハ研究所によって行われている。この調査は、西ドイツ全体と西ベルリンを対象にしているので、方言の有力な南ドイ

ツと、反対に標準語化した北ドイツへの南北の傾斜の事を常に考えながら判断しながらではないが、「この地域の方言を話せるか？」との間には、53%が、「ja」、47%が、「nein」と答えている。方言が未だ用いられる（通用する）場は、家族、友人同志の集まり、職場があげられた。学歴の高いほど、また地域の規模が大きくなるほど方言使用が無くなっている。これらは、従来からの傾向と事実であるが、重要な変化が起っているのが確認された。それは、16歳～29歳までの若い世代が、仕事において、他の世代よりも高い率で方言を用いているということである。また方言を話せる人について、全体の比率は66年の59%から、80年に53%と減っているものの、話せる人は前よりもひんばんに方言を使用していることも判明し、高学歴の人々の態度が変化して、66年には、この人々の29%は、方言を話せるけれども使うつもりはないと答えていたのに対し、80年には、そのような人は16%にすぎなくなっていた。このような結果は、方言が退行していると一律に言いきれない事を示している。70年代には、西ドイツで「方言ルネッサンス」あるいは「方言ブーム」と呼ばれる現象が起った。これは、しかし、各地での「郷土運動」と連動していた。方言に対するイメージが変化して、ネガティブからポジティブに変わりつつある。方言は、グラスや、またハイデガーに見られるように、「故郷」、「同一性」のシンボルである。教養や出世、コミュニケーションの道具、手段としての標準語に対して、方言は、より情緒的同一性の言葉であり、「近み」の言葉、「家」の言葉である。標準語の使用範囲が拡大する一方で、方言は衰退するのではなく、再発見されているように

見える。多くの人々が、方言のみならず標準語を使えるようになってきている現在、この二言語併用の中で、方言使用への気おくれがなくなり、状況に応じて二つの言葉を使いわけるとの傾向が出てきた。方言は、もはや階層、地域の中に一方的に閉じこめられず、第二の言語道具<sup>(4)</sup>としての自由な機能を得て、標準語万能の中に、集団や地域の中での個性化、個人化に役立てられていると考えられる。方言の衰退の原因の一つとして考えられたところの、移動性の増大ということも、考えられていたこととは逆の効果ももたらした。つまり、田舎、狭い土地、牧歌的なものの再発見に結びついたということである。

方言の問題は、つまるところ「故郷」の問題である。工業化・都市化が、多様な意味での「環境」の破壊に結びついている現代は、「故郷」を危うくするのである。「故郷喪失」の中で、失われた同一性を求める途上で、方言を新たに位置づけなければならない。

#### 注

- (1) Mitscherlich / Kalow (hrsg): Hauptworte, Hauptsachen. München. 1971. S. 14.
- (2) Grass, Günter: Deutscher Lastenausgleich, 1990. 邦訳「ドイツ統一問題について」, p. 159~179.
- (3) 前掲, Mitscherlich; Hauptworte, Hauptsachen. S. 24.
- (4) Besch, Werner: Entstehung u. Ausprägung d. binnensprachlichen Diglossie im Deutschen. In: Dialektologie, HSK 1. 2. Berlin. 1983. S. 1402.
- (5) ibid. S. 1405.
- (6) Löffler, Heinrich: Mundart als Sprachbarriere. In: Wirkendes Wort, Heft 22. 1972. S. 25
- (7) Bausinger, Hermann: Dialekt als Un-

terrichtsgegenstand. In: Der Deutschunterricht. Heft 35. 1983. S. 77.

- (8) Moser, Hugo: Stamm und Mundart. In: Zeitschrift für Mundartforschung. 20. 1951. S. 130.
- (9) ibid. S. 130.
- (10) ibid. S. 130.
- (11) ibid. S. 131.
- (12) ibid. S. 131.
- (13) Bausinger, Hermann: Dialekt als Unterrichtsgegenstand. In: Der Deutschunterricht. 35. 1983. S. 79.
- (14) Moser, Hugo: Stamm u. Mundart. S. 133
- (15) Bausinger, H.: 前掲書, S. 79.
- (16) Moser, H.: 前掲書, S. 42
- (17) Walser, Martin: Heimatkunde. Aufsätze u. Reden. Frankfurt. 1968. S. 51.
- (18) ibid. S. 56.
- (19) Rein, Kurt: Bestimmenden Faktoren für den variierenden Sprachgebrauch des Dialektsprechens. In: Dialektologie. HSK, 1. 2. Berlin. 1983. S. 1445
- (20) Rein, Kurt: Funktion u. Motivation d. Gebrauchs v. Dialekt u. Hochsprache im Bairischen. In: Zeitschrift für Dialektologie u. Linguistik. [87] 42, 1975. S. 260.
- (21) Löffler, Heinrich: 前掲書, S. 29
- (22) Ammon, Ulrich: Soziale Bewertung des Dialektsprechers. In: Dialektologie. HSK. 1983. S. 1500 ff.
- (23) Bausinger, H.: 前掲書, S. 75.
- (24) Moser, H.: 前掲書, S. 141.
- (25) Rein, K.: 前掲(20). S. 279.
- (26) Ammon, Ulrich: Dialekt als sprachliche Barriere, In: Muttersprache. 82. 1972. S. 227.
- (27) Reitmajer, Valentin: Der Einfluß des Dialekts. Marburg. 1979 S. 16.
- (28) Greverus, Ina-Maria: Auf der Suche nach Heimat, München 1979. S. 79.
- (29) 芝田 美栄子「ヘーベルのアレマン方言詩『夏の夕べ』について」, 『独逸文学』32, 1988, p. 89.

- (30) 余川 文彦 「島根大学論集 (人文科学)」  
第6号, p. 25.
- (31) Walser, M.: 前掲(17). S. 52 ff.
- (32) ibid. S. 56.
- (33) ibid. S. 56.
- (34) Greverus, I. 前掲(28). S. 70.
- (35) Heidegger, Martin: Hebel, Der Haus-  
freund, Pfullingen. 1985 (5. Aufl.) S. 26.
- (36) Heidegger, Martin: Sprache und  
Heimat, In: Hebbel Jahrbuch. 1960. S. 27.
- (37) Farias, Victor: Heidegger u. d. Nation-  
alsozialismus. 1989. 邦訳「ハイデガーとナ  
チズム」1990. p. 329.
- (38) Heidegger. M.: 前掲(36). S. 28 ff.
- (39) ibid. S. 50.
- (40) Besch, Werner: 前掲(4). S. 1409.